書評

田中きく代、中井義明、朝治啓三、高橋秀寿編著『境界域からみる西洋世界――文化的ボーダーランドとマージナリティ――』

阿部拓児　西山喬貴
福元健之　南雲泰輔

本書は西洋世界における「文化的ボーダーランド」、あるいは「文化的境界域」を軸概念として、古代から現代にまでおよぶ多種多様なテーマをあつかった合計一三篇の論考を収めた論文集である。まずは、本書が出版されるに至った経緯について簡単に述べておきたい。関西の複数の大学を主体とする西洋史の学会に「歴史家協会」なる組織が存在するが、本書はその活動を通じて出来上がった、各大学間のゆるやかな連携の中から生まれた「道」と「境界域」にかんする共同研究「西洋史の諸相における文化的ボーダーランドとマージナリティ」における研究成果の結実である。本書をめぐっては、すでに平成二四年七月七日、京都大学文学部に於いて編者代表である田中きく代・関西学院大学教授ほか数名の編著者を交えての合評会が開催された。当会での討議を踏まえ、各評者の意見を改めて整理し執筆されたのが、本書評である。本書ははなはだ広大な時間・空間を対象とする書物ではあるが、集団間の関係から類型化される三つの「境界域」に着目した前半三部――「辺境としての境界域」（第Ⅰ部）、「内なる辺境としての境界域」（第Ⅱ部）、「文明・帝国・民族の交差点としての境界都市」（第Ⅲ部）――およびこれら三つの「境界域」における表象のあり方に焦点を当てた第Ⅳ部「表象される境界域」という構成をとることにより、全体の議論に一定の統一感が保たれている。以下では本書の構成に従いつつ、第Ⅰ部、第Ⅱ部を西山喬貴（イギリス帝国史・東アジア国際関係史を専攻）、第Ⅲ部を福元健之（近代ポーランド史を専攻）、第Ⅳ部を阿部拓児（古代ギリシア史を専攻）が分担して論評した上で、それを受けた南雲泰輔（後期ローマ・初期ビザンツ史を専攻）が本書全体にわたる軸概念、すなわち歴史学における「境界域」概念の意義にたいして総括となるコメントを提示する。（阿部拓児）

第Ⅰ部には、「ある集団の周縁部で、外界との境に辺境として現れる場合の境界域」である「辺境としての境界域」にかんする三篇の論考が収められている。

第一章、阿河雄二郎氏の「海軍工廠都市ロシュフォールの誕生――近世フランス海軍成立史のひとこま」では、第二次英仏百年戦争の渦中にあった近世フランス、その海軍政策において、海軍工廠都市ロシュフォールが占めた位置について考察がなされる。論考中では、ロシュフォールが位置したシャラント地方の経済・通商上の重要性、コルベールの海軍政策の位置付けや特徴、その中でロシュフォールが持った「役割や意味」に言及がある。

第二章は、金澤周作氏による「英国コーンウォールにおける海

難の近代史――ジョン・ブレイ翁の『回想録』（一八三二年）を読む」である。近代イギリスの宿痾であった海難の地域共同体における意味、そして海難から見た地域共同体の様相が、イギリス南西部コーンウォールのビュードを事例に検討される。金澤氏は回想録を「透明度の高くないレンズ」とし、レンズの先のものと「くすみ」自体の意味、双方を考慮する。そして、ビュードでは海難に際して、国の制定法と境界域の慣習がせめぎあい、自動詞的に秩序を生成していたと論じる。

横山良氏の「サンフランシスコのヴィジランティズム――「共和国ごっこ」の劇場？」（第三章）は、一八五六年、サンフランシスコで発生した自警的行動である「ヴィジランティズム」、その同時代的な状況と意味について、先行研究を参照しつつ展望を示したものである。横山氏はヴィジランティズムを、ブルジョアがプチブルを動員した革命ごっこ、「下に向けられた共和主義」と評価する。また、労働者の組織的運動、階級意識の分明化も未だしというサンフランシスコの状況が、このような階級協調的共和主義を可能にしたと指摘する。

第Ⅱ部には、「集団の内部に辺境として存在する境界域」である「内なる辺境としての境界域」に関連した三篇の論考が収録されている。

第四章、飯田収治氏の「ドイツ第二帝政下のポーゼン――境界域における諸民族の相克と共生」においては、第二帝政期ドイツにおいて国民統合をめぐる紛争の場となった、プロイセン東部国境付近にあるポーゼンが取り上げられる。「郷土感情」を持つポーランド人と、ドイツ側の「ゲルマン化政策」の間でどのような関係が取り結ばれたのか、それは両者の対立に終始するものなのか。飯田氏の見解は否定的であり、「矛盾にみちた複合的な構造」が存在したとされる。ポーランド人によるドイツ的慣習や思考の受容、「敵対する陣営」に二分されつつも民族共生の側面を持つポーゼン、そしてドイツ当局の政策に必ずしも従順でないポーゼン・ドイツ人、此等の事実が著者の主張の裏付けとして提示される。

赤阪俊一氏による「中世末期ロンドンの娼婦たち――ロンドン郊外サザクの娼館条例を読む」（第五章）では、女性の労働としての売春業、特に中世のロンドンはサザクの娼館において娼婦の置かれた状況が論じられる。赤阪氏は、サザクの娼館に対して制定された規則を分析し、娼館が担った「秩序維持」の役割を明らかにしている。さらに、娼婦が一種の自営業者として自らの才覚を活用して働いていたこと、セクシュアリティを特定の個人によって所有されない「みんなの女」として扱われていたことも明らかになる。

「一七世紀パリにおける宗教と政治――ジャンセニスムとパスカル」（第六章）は「異なった原理を象徴する領域であり、制度」と著者の山上浩嗣氏が定義する宗教と政治の関係が、その文脈において「境界域」となるパリを事例に考察される。「内なる辺境」として、王権からもカトリック教会からも異端視されたジャンセニスム運動が、その反世俗的・反政治的性格によって逆説的に政治性を帯びることになったとの記述が興味深い。さらに、時代を特徴付けるテキストとして、ジャンセニスム運動に加担したパスカルの政治論が分析される。

第Ⅰ部と第Ⅱ部を通じて注目されるのは、「境界域」が地理的にも非地理的にも理解されていること、それが「境界域」の特徴的な枠組とどのような関係にあるのかという点である。第Ⅰ部において、「境界域」は「辺境」と互換可能なものとして提示されている。そのなかでも、阿河論文と金澤論文においては地理的「辺境」が、横山論文においては思想的「辺境」が強調される。「辺境」、そして「境界域」は地理的にも非地理的なものとしても理解されうるのである。「辺境」と互換可能であるとされた「境界域」概念の独自性のみならず、概念の有効性を考える上でもこの点は重要であろう。特に第Ⅱ部において端的に示されるように、「境界域」が地理的な制約を抜け出し、関係性にまで適用されることも考慮するならば、地理的な「境界域」と非地理的なそれ、両者は包括的に理解されることになる。この場合、両者の関係は如何に理解しうるのか、また、そのような「境界域」の射程は茫々たるものになってしまうのではないだろうか。しかしながら、「境界域」はとめどなく拡散していく概念ではない。その点は、第Ⅱ部所収の飯田論文によって示唆されている。飯田論文では、ポーランド人とドイツ人、両極に引き裂かれんとしつつも、独自の関係性を生みだしていたポーゼンの人々、つまり、表としての対立、裏としての独自の共生社会が提示されているのである。この両面を複眼的に捉えるのが「境界域」の特徴ではないだろうか。「境界域」の射程はどこまで拡がりうるのか、概念の特徴と射程はどのように絡み合うのか、本書評の最後に南雲氏が指摘する既存の研究との関係を含め、今後の議論が俟たれる。

（西山喬貴）

第Ⅲ部「文明・帝国・民族の交差点としての境界都市」は、諸集団間の「境界域」のなかにある都市を考察した三篇の論文から構成される。

まず第七章、中井義明「東西世界のはざまとしてのミレトス——ある境界都市の歴史」は周囲の環境的要因（鉱物資源の不足、交易に適した地理条件など）に注目しながら、ギリシアとペルシア、東西世界から訪れる商人、外交官や旅行者に開かれた都市として発展したミレトスを描く。従来の研究は「市民／非市民」の観点から古代都市の閉鎖性を強調してきたが、本章ではその理解がいかに一面的であったかが示される。

続く第八章は、ボルドーが海峡を越えてプランタジネット家に帰属していたことを分析した朝治啓三「中世英仏関係にみる境界都市ボルドー——ワインと平和」である。時は人びとが自らの保護を求めて帰属する支配者を変え、「国境線は確定せず、絶えず移動し得た」中世。ボルドーは在地の権力を維持し、かつ封建的臣従を求めてくるカペー家からの保護を得るために、大陸にまで直接的な支配を及ぼせないプランタジネット家への帰属を選んだのだと説明される。

そして第九章、藤井和夫氏による「クラクフにおける民族の再生と新興市民層の形成——境界都市のダイナミズムと近代」は、オーストリア帝国の辺境へと編成されたクラクフのポーランド人社会について論じる。帝国への統合は都市を帝国規模の人や知の流通に置くことになり、これによって促進された社会変容が都市の近代を担うポーランド人市民層（大学教員、エンジニアや芸術家）をもたらしたという。このクラクフが帝国国外からもポーラ

ンド人を引き寄せていたという指摘も、ここでは重要である。

「国境」という観点から三篇を眺めたとき、古代から中世にかけて幅をもった空間的なそれが徐々に狭まり、さらに近代以降は固定的かつ線的なものになっていくようにみえる。空間的な前者を「くにさかい」、線的な後者を「コッキョウ」と置くならば、「コッキョウ」に沿った領域支配の確立は近代国家以降のことであって、古代や中世の世界にそれを求めることで歴史像に歪みが生じるであろうとは容易に想像がつく。では逆に、近代に「くにさかい」を見ることは歴史像に歪みをもたらすだろうか。近代における「コッキョウ」の役割を無視しえないことは言を俟たないものの、グローバル化が進行する現在にあって、この「くにさかい的近代」を認識してみようということが「境界域」概念に込められた問いであると評者は考えている。クラクフが「コッキョウ」を跨いだポーランド人たちの「境界域」のなかにあったことは既に見たが、これは人の移動を規定する文化的空間としての「境界域」が「コッキョウ」と併存していることを示していよう。「境界都市」論が指し示すところの、人・モノ・知の移動をときに促進し、ときに阻害した文化的空間の近・現代史は、大きな可能性に開かれているのである。

（福元健之）

辺境、内なる辺境、都市という場としての「境界域」の性格によって区分された前半三部とは異なり、第Ⅳ部「表象される境界域」は各所において文化的なボーダーラインやマージナル性がどのように立ち現れるのか、その表象のあり方に着目している。

まずは、東西冷戦下の都市において各々の国民性がどのように相対しながら創出されたかを論ずる、高橋秀寿「冷戦の境界ベルリンの空間形成――国民をつくる空間」（第一〇章）。第二次世界大戦中の空襲により廃墟となったベルリンは、戦後さらに東西に分割されたわけだが、それでも「壁」が構築されるまでは相互に交流があった。この時代の東西両ベルリンが目指した理想の国民像（東の「人民（フォルク）」、西の「平準化された中間社会」）を都市計画の観点から読み解く高橋論文は、第Ⅳ部のテーマにもっとも合致した論考である。

続く関隆志氏の論考「アテナイ市民の自覚と美術表現――民主政成立期における陶工の意識変化」（第一一章）では、時代がいっきに紀元前へと移る。紀元前六世紀末から五世紀初頭にかけてキュリックス（酒杯の一種）に起きた形態上、美術表現上の様々な変化を、著者は僭主政崩壊から民主政成立というアテナイ政治の変遷と結び付け、そこに生じた自由の気風が陶工の自己表現を可能にしたと推論。大胆かつ鮮やかな論の運びに魅せられる一篇である。

第一二章の加藤哲弘「一七世紀アムステルダムにおける古代の再生――レンブラントによる市庁舎壁画構想をめぐって」も、関論文と同様に芸術作品を主役に据える。一七世紀「黄金時代」のアムステルダム新市庁舎に飾られるはずだった、あるレンブラント作品の制作から返却までの謎を追いながら、そこに加藤氏は「遅れてきたルネサンス」において旧体制の寓意表現・神格化の手法を避け、もう一つの権威である古代世界を味方にしなければならなかったという、プロテスタント新興国オランダの特殊事情を指摘する。

本書の掉尾を飾るのは、編者代表である田中きく代氏による

「エリー運河全通祭と一九世紀の政治文化――アメリカ民主主義の進展とパレード」（第一三章）。田中氏は、ニューヨーク州を横断するエリー運河の全通にともない開催されたパレードを、エリートと一般の人々との複層的かつ多様な相互関係を伝える文化的境界域として位置付ける。そして著者は、そこに参加者のアングロ・サクソン系の優位意識、自由人としての自負、あるいは理想的な家族像の提示等のブルジョワ的価値観などを読み取るのである。

以上の四篇は表象のあり方を論ずるという点でまとまりを見せるのだが、その一方で本書の軸である「境界域」概念については曖昧さを残す。例えば、関論文は考察対象の地域を「当初は文化的境界域の一国に過ぎなかったアテナイ」と表現するが、ここでの「文化的境界域」が厳密には何と何の境界であったのかについては語られていない。また、加藤論文においては「境界域」という表現も直接は用いられていない。素直に考えれば、オランダはプロテスタントとカトリック世界の「境界域」として捉えられるのだが、加藤氏が指摘するオランダの特異性は、ベルギーやブラバントといったカトリック地域と接していたという地理的な境界性に由来するのか、新興国であったという政治的な事情に由来するのかは、詳しく議論されていない。本書の意義を際立たせるためにも、これら「境界域」の設定はより慎重になされてもよかったのではなかろうか。

（阿部拓児）

本論集の特色は、第一には先に紹介された諸論考にみられるごとくそこで扱われた題材の多彩さであり、第二にはこれら多岐にわたる題材の軸として設定された「境界域」なる概念である。本書評の最後に後者について考えたい。

本論集序章「文化的ボーダーランドとマージナリティ」での編者の説明によれば、従来の研究が扱ってきた「境界」が、紛争・対立・集団間の相違を象徴的・明確に表現する「ハードな線」であるのに対し、本論集の主題とする「境界域」は、調停的・融和的要因を含み、多様かつ複層的で、画一的ではない「ソフトな空間」を指すとされる。かかる特殊の意味における「境界域」概念は、本論集の直接の前提をなす『〈道〉と境界域』（田中きく代・阿河雄二郎編、昭和堂、二〇〇七年）で既にその萌芽的記述がみられたが、この続編たる本論集においては一層の発展的内容が与えられた。すなわち、本論集において「境界域」は、「文化的ボーダーランド（cultural borderland）」や「文化的境界域」とも換言されているが、そこでは、「様々な人や言語、文化、経済などが混じり合」い、「文化の交差が生じるだけではなく、新しい文化がその接触を通じて形成され」、「融和的な調停的な要素が併存し、対立する両者に共生を促し」、「異質なもの同士が混在し、相互に影響を及ぼしあ」い、「単一の国民性に統合されることのない多文化的状況」が存在し、さらには「近代化を拒みつつ近代と前近代が同居」する、という。しかも編者は、この「境界域」の「調停的要因の働き」を何よりも重視し、そこにこそ「歴史のダイナミズム」があると主張するのみならず、かかる「調停的要因」を注視することによって、人びとが悲惨から再起してきた過去のなかに「希望を見出すこと」こそ「歴史家の役割」なのではないか、と現代社会において歴史研究者が果たすべき使命に論及

しさえする。

かかる「境界域」概念が、西洋世界のなかで具体的にいかなるかたちで存立しえていたかは、本書評において先に紹介された諸論考が各々論じたところであって、これらに徴する限り、本論集が「西洋世界の時空間で、歴史空間の水平方向の境界域にも、垂直方向の境界域にも、かなりの多様性を提示することができた」（本論集「あとがき」）書物であることに疑念の余地はない。しかし、編者が「一国史や国民国家史では扱いきれない重要な事象が歴史にはあり、それらを取り上げ、分析し評価するための枠組みを私たちは必要としている」（本論集序章）と述べ、「境界域」をかかる枠組みとして提示したことについては、それが歴史学の方法上の重要な問題提起であるだけに、西山・福元・阿部の各氏評にもあるごとく、なお様々な角度からの検討を要するといわねばならない。ここでは紙幅の制限もあり、全体にかかわる問題点を二点のみ指摘する。

第一の問題は、本書のいう「境界域」の概念としての独自性である。本論集において概念としての「境界域」を説明する序章では、文献註と説明註のいずれもが付されておらず、本文でも文化人類学者ターナーと哲学者フーコーの名前が挙げられるのみである。この事実は、一方においては、本論集の「境界域」概念について、歴史学における既存の諸研究とは独立に考案されたものであり、極めて高いオリジナリティを持つ概念である、との評価を可能にするとも考えられる。しかしながら他方においては、かかる註記の不在が、本論集の学説史上の位置付けにかんし、重大な問題を引き起こす可能性もある。それというのは、本論集の「境界域」概念と、目的や射程の点で重なり合い、共通する部分のある概念や用語が、我が国の既存の諸研究によっても提示されてきた過去が存するからである。[1] それゆえ、先行学説による類似の諸概念・用語との関係を明示することは、「境界域」概念の独自性を主張しかつ高めるために、本論集にとり必須の手続きではなかったであろうか。

関連する問題として第二に、本論集は一国史的・国民国家史的視点を強く批判しているが、かかる批判そのものの妥当性もまた検証する必要があるのではないか。かつて福井憲彦氏は「一国史的な枠組で問える範囲は、実は限定的であろう」[2] と指摘したが、この指摘が正当であるならば、かかる限界のある一国史・国民国家史を、本論集はなぜまた今、批判しようとするのか、その問題意識を改めて説明しなければならなかったと考えられる。そうでなければ、これに代わる枠組みとしての「境界域」概念が今後持ちうる可能性も、見通し難くなってしまうからである。しかしながらこのとき、本論集に含まれる複数の古代史・中世史の論考は、かかる本論集の問題意識そのものを相対化するために有意の役割を果たす可能性がある。奇妙な言い方に響くかもしれないが、本論集のいうところの、線的な「境界」ではなく空間を意識する「境界域」概念は、考え方としては、先の福元評が「くにさかい的近代」との表現を与えたように、近代的意味における「境界」の存しなかった古代史・中世史を扱う際の歴史的感覚をもって、近代史・現代史を考えることである、とも換言しうると思われるからである。

それにしても、「境界域」という、まことに曖昧な空間に対し

て本論集が寄せた問題意識は、評者には極めて日本人的なそれに感ぜられる。そのことは――もしや誤解を招く連想かも分からないが――かつてある哲学者が、「東洋人の世界は薄明の世界である。しかるに西洋人の世界は晝の世界と夜の世界である。晝と夜との對立のないところが薄明である。[3]」と述べたごとくであって、その意味において本論集は、「日本人による」西洋史研究の優れた成果と評価しうると評者は考える。しかし、かかる「日本固有の西洋史学」については、近時これを「あるはずもない」と明確に否定する立場もあり[4]、我が国の西洋史学のあり方をめぐって、今後も様々な議論がなされることであろう。かかる決定的な答えの出ない可能性がある議論に拘泥することは、生産的ではないとの見方もあろうが、必要なことであると思う。無論、本論集は、「日本固有の西洋史学」の問題を直接に論じているわけではないが、その読者に対して、かかるより高次の問題への注意を喚起させる、何かが含まれているのである。

（南雲泰輔）

① 管見の限りであるが例えば、日本史家の網野善彦氏、民俗学者の赤坂憲雄氏による関連諸業績の他、財団法人史学会編『歴史学の最前線』東京大学出版会、二〇〇四年所収の村井章介・金容徳・荒野泰典各氏の論考及びそれに対する桜井万里子氏の評（「編集を終えて」）、テッサ・モーリス・スズキ（飯笹佐代子訳）「国民国家の形成と空間意識」上村忠男ほか編『歴史を問う(三)　歴史と空間』岩波書店、二〇〇二年、一一一～一三〇頁などを参照。

② 福井憲彦「社会史再考」史学会編（二〇〇四年）一五一頁。

③ 『三木清全集　一』岩波書店、一九六六年、一六三頁。

④ 小澤実「中世一般」『史学雑誌』一二一編五号、二〇一二年、九三七～九三八頁。

（A5判　三四八頁　ミネルヴァ書房
二〇一二年三月　税別三八〇〇円）

（阿部拓児　京都府立大学文学部准教授）
（西山喬貴　ユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドン修士課程）
（福元健之　京都大学大学院文学研究科修士課程）
（南雲泰輔　日本学術振興会特別研究員）